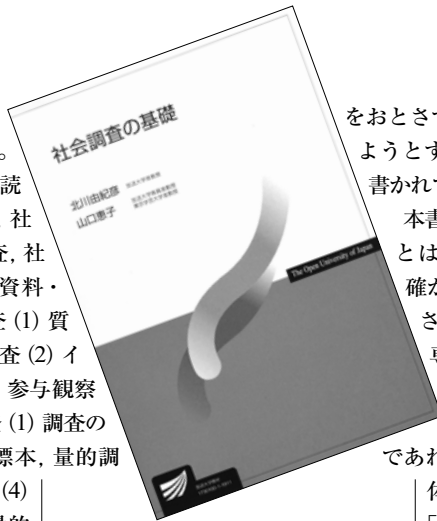


本書は放送大学教材として書かれたものである。

以下の、15回分の授業を一気に読み通した。社会調査とは何か、社会調査の歴史、研究と社会調査、社会調査の対象と方法、既存の資料・データの収集と活用、質的調査(1)質的調査の種類と考え方、質的調査(2)インタビュー調査、質的調査(3)参与観察とフィールドワーク、量的調査(1)調査の手順、量的調査(2)母集団と標本、量的調査(3)調査票の作成、量的調査(4)調査票の点検とデータ作成、量的調査(5)変数間の関係を把握する、量的調査(6)母集団を推測する、社会調査と現代社会。「オンライン授業でありさまざまな制約があるなかで、よくまとめてあるなあ」と感動した。

感動した理由。それは本書には洗練された内容と文体が満ちていることだ。初めて社会調査を学ぼうとする人に、いったいどのような内容を伝えればいいだろうか。あれもこれも重要であり伝えるべきだと私なら悩むだろう。著者たちも悩んだと思う。限られたスペースで、「基礎」として何を避け何を捨てるのかを考える営みは「言うは易く、行い難い」ものだ。それを著者たちは見事に実践している。

文体も淡々としたなかに、一定の知的水準が守られている。これまでに社会学の初心者に向けてさまざまなテキストが刊行されている。中には魅力ある独自の切り口や視角から思わず読み込んでしまう素晴らしい作品もあるが、たいへいは「わかりやすい内容と文体とは何か」を誤解し、社会学の面白さを読者に実感させることに失敗し、自分たちの講義用テキストとして生き残るだけだ。本書には、「どうだ、これだけわかりやすく書けば十分だし、面白いだろう」と言わんばかりに読者に理解を強いるような文体は一切ない。できるかぎり内容の水準



社会調査の基礎

北川由紀彦 編
山口恵子

放送大学教育振興会
2019年
A5判, 216頁
2,400円+税

をおとさずに「わかりやすさ」を追求しようとする「誠実な」文体で一貫して書かれているのだ。

本書を読んで、社会調査の「基礎」とは何だろうかと改めて考えた。確かに本書のように網羅的に整理された内容を学ぶことでさらに専門的な知識や技法などへ至る「入口」に立つことはできるだろう。しかし社会調査は質的であれ量的であれ、人間が自らの身

体や感性を最大限に駆動させる「生きられた」実践なのだ。そう考えると本書では描かれていないもう一つの「基礎」があるのではないかと思う。

かつて私はエスノメソドロジーの視点をもとにして質的調査のセンスを自由に語る『あたりまえ』を疑う社会学(光文社新書, 2006年)を書いた。どうしてもこの新書を書きたかった大きな理由の一つが「鶴飼正樹さんの『大衆演劇への旅』という傑作をきちんと紹介し、その意義を読み解きたい」というものだ。しかし、通常のテキストや論集

では紙幅も限られている。そこで考えたのが新書というメディアであり、結果的に「あるものになる」という一章すべてを使って『大衆演劇への旅』の内容を紹介し、苦悩しながらも変貌していく自らの姿を反省的に描く鶴飼さんの優れた質的調査のセンスを読み解いていったのだ。私はなぜあの新書を書いたのだろうか。そうだ、社会調査「体験」の「基礎」とは何かを語りたかったのだろう。

「基礎」を丁寧に解説する目的を達成するために、本書には心地よいまでの「抑制」が効いている。次は「抑制」をはずし、著者たちが興味深い事例を自由に読み解いた『社会調査「体験」の基礎』をぜひとも読んでみたいと思う。